

水と生きる

北会津中学校

三年

遠藤

駿太郎

新緑が目眩しい季節になりました。近くを流れる川は例年より多くの水をたたえながら流れています。まるで水不足の心配はないといわんばかりです。日本の気候は、雪や梅雨さらに秋雨などから、生活において水不足に悩まされることはないように連想させます。そのうえ水道網も整備され、飲み水や生活用水も家々で簡便に賄うこともできます。水、

水道は「存在するのが当たり前」のように私たちのそばに寄り添っています。

でもそれは当たり前のことなのでしょうか。ひと度断水となればどうでしょう。地震などの災害や水道管の破損事故を思い起こしてみてもその影響は明らかです。また夏が近づくと喝水、取水制限のニュースを見聞します。タンクを持ち給水の順番を待つ方々、干上がリそうなダム、水のない田畑。日本の水の実状はどうなのでしょうか。

「二〇二二年 日本の水資源の現況」には、
各国の年平均降水量と一人あたりの降水量が
示されています。日本の年平均降水量は約千
七百mmであり、世界平均の約千二百mmより多
い状況です。しかし、一人あたりの年間降水
量は世界平均の約四千 m^3 に対して千 m^3 ほとし
かありません。このことから日本は、「降水
量には恵まれているが、利用できる水の量は
少ない」ということが読み取れます。私は、
日本は水に恵まれていると思いついていたの

で、一人が使える水へ降水量が世界平均の四
分の一しかないなんて想像もしていませんで
した。

疑問に思い調べていくと、これには日本の
地形と気候が大きく関係していることが分か
りました。日本は国土面積の約四分の三が山
地で平地の少ない地形になっています。また
島国で国土面積も少ないため川の長さも短い
です。例えば信濃川とナイル川の長さでは比
べようもない差です。山がちな地形で短い川

ということとは当然流れも急です。また梅雨や台風で降水量が多くなる時期が偏っています。そのため水を安定的に手にすることができません。そこで先人は様々な工夫を凝らし、水を確保・分配する仕組みをつくりました。私の暮らす地域でも、ため池やダム、用水路を目にします。今の私たちの生活が水に困らないのは、先人の方々がため池やダム、水道をつくり安定的に水を供給できるように整備してくれているからなのです。

貴重な水資源として地下水があります。地下水は森林に降った雨が地面に染み込み、土や岩の層を何十年もかけて移動し自然にろ過され、地下二十〜百mほどにたまっていきます。それが湧き水となり川や湖として地表に出てきます。地下水ができる過程で重要な役割をするのが、森林の「ふかふかの土」に腐葉土です。これが雨をしっかり地下に吸収するスポンジの役割を果たすのです。腐葉土は植物の根や落ち葉、虫や動物、フンや微生物な

どのよつてつくられます。それぞれが絡み合
 い隙間の多い構造が生み出されます。隙間の
 ない土や石では水を吸収できません。森林と
 その地面の整備も水資源には欠かすことの
 きないものなのです。
 S D G s へ持続可能な開発目標という十
 七個の目標があります。十七の目標を見てい
 くとしてすべての目標は水と関係していることが
 わかります。それは「水は生活の基本」だか
 らです。目標一「貧困をなくそう」では、貧
 困のために水道やトイレを整備できず安全に
 水を利用できません。目標二「飢餓をゼロに
 する」では、農作物を育てるには水が必要です。干
 ばつで水不足になると食べ物もつくれません。
 それらのなかでも目標十三「気候変動に具体
 的な対策を」が注目されます。
 地球の気温が上がると渇水や豪雨が起きや
 すくなります。もとも水の少ない場所では、
 気温が上がると水が蒸発しやすくなり乾燥が
 進み干ばつになります。干ばつは農作物の生

産量が減少するだけでなく人や生物が住めない環境を招きます。また水の多い場所では気温が上がると、空気中の水蒸気の量が増え湿度が高くなります。湿度が高くなると雲が多くなり、強い雨が降りやすくなりそれが洪水にもつながります。気候変動は地球全体の水問題なのです。

私は、水の問題は目の前の水を見るだけでは解決しないのだと気付かされました。水はどのように存在するのか、その仕組みは今後

も持続可能なものなのかということにも関心を持つべきです。また水の問題は日本だけの問題ではありません。遠く離れた国々にも目を向けることが大切です。地球の水は空気、雲、海などの姿で私たちとつながっているのですから。一人ひとりが一つでもよいので、水そして水道について関心を持ち、伝えあう。それが持続可能な水道の未来につながるのではないのでしょうか。